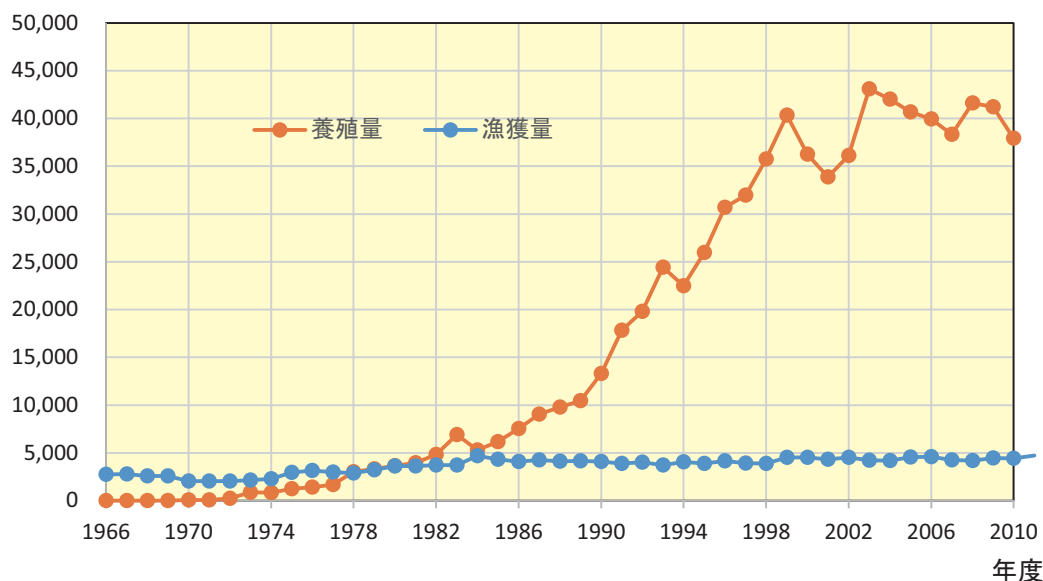


このようなマダイの生活史を考えると、産卵し、稚魚が生育する間には藻場・干潟が重要な場所となるが、藻場・干潟は埋め立てや工場・生活排水の影響により減少したため、1970年頃天然マダイの漁獲量は2,000トンまで減少した。このため、資源の回復を目的とした種苗生産試験が進められ、1973年から放流事業が始まった。このように、マダイの種苗放流が盛んに行われてきたため天然群との置き換わり、放流効果、幼魚の乱獲問題（小型底引き網）等の課題はあるものの、漁業資源を確保するための事業により、マダイの漁獲量は約5,000トン前後で推移しているところまで回復してきた。また、愛媛県を中心として瀬戸内海において養殖マダイの生産も盛んにおこなわれており、最近では、養殖マダイの生産量は、天然マダイの漁獲量の8倍近くにもなっている（図17）。

生産量(トン)



出典：農林水産省統計資料

図17 瀬戸内海におけるマダイの漁獲量と養殖量の推移

5. 瀬戸内海の食文化から見た新たな環境保全の取り組み

豊かで美しい瀬戸内海を後世に残していくためには、現在の行政や企業の取り組みを継続的に実施するだけでなく、瀬戸内海の魅力を再認識し、瀬戸内海に住む人々の海への関わりを取り戻し、高めるための普及啓発活動が強く求められている。

そのため、各地で実施されている従来の環境教育や体験学習に加えて、森・川・海の物質循環や、地産地消の促進を通じた地域の活性化に視点を置いた啓発活動による新たな瀬戸内海の環境保全意識の醸成を図る必要がある。

また、瀬戸内海の沿岸域では市民、漁業者、事業者により景観鑑賞、漁業、レクリエーション、海運業など、人々の生活の中で多種多様に利用されてきたことから、瀬戸内海の多面的価値（「道」、「畑」、「庭」に例えられる機能）を再認識することも重要な視点となってくる。

新たな環境保全意識の醸成には、瀬戸内海の多面的な機能と水環境が密接に関係していることを理解するとともに、瀬戸内海の沿岸住民に対する新たな啓発活動の視点として、身近な生活を通じて、生物多様性に富む豊かな「里海」としての瀬戸内海を再生していく必要がある。

「瀬戸内海における水環境を基調とした海文化」は、海への親しみや関心を高め、人々とのふれあいや絆を強めるツールとして、各地に伝わる海文化の情報（食文化、伝統行事等）を収集・整理し、それらの情報を瀬戸内海の沿岸域の市民へ提供することを目的として実施するものである。最初に情報収集する文化は、瀬戸内海沿岸の市民に最も親しみのある「食文化」とし、順次、伝統行事・文化などの情報を収集・整理する予定である。